



めあてについて考える …つづき…

NO.25 では、これまで紹介してきためあての考え方のおさらいをしてきました。前回号で、概ねめあての立て方はイメージしていただけるでしょうか。今回は、前回のおさらいとして、この前の学校教育課訪問の際に先生方が立ててくれためあてを使って具体的に考えてみたいと思います。

まず、いくつか示してくれていためあての中で、前回示した説明と当てはまっていない、あまり望ましくないものを紹介します。(実際に示されたものとは違います。)

①目標は示しているが、漠然としているめあて

「二次方程式を解く。」

「エネルギーの仕組みを知る」

「レッスン5の英文を読む」

目標を示してはいますが、具体性に欠けています。実際に子供たちに最終の Goal を伝えていますが、何を通してなのか、何ができることでなのかが明確ではありません。これでは、わからない子にとっては、できない原因がなんなのかが示されていないこととなります。

②単元(小単元)名を示すだけのめあて

「二次方程式とグラフ」

「レッスン5 過去形を使って」

これでは、ゴールになっていません。やることを伝えているだけになります。

逆に見本となるようなめあてを、今回の公開授業の中でも何人かの先生方は具体的にわかりやすいものを提示してくれていました。実際に使われていたものをいくつか紹介します。

○「事実から筆者がどのような考えを導いているのか考えよう」(国語)

○「6～8世紀の中国は、アジアや世界ではどのような存在であったのか考えよう」
(社会)

○「少子高齢化の原因と課題を資料から読み取ろう」(社会)

○「6000年前の人々がどうやって『時』を知ったのかを読み取ろう」(英語)

何を使って考えるのか、理解するのかが明確になっています。そして、最後に評価のどの観点で授業が締めくくられるのかがめあての中にはっきりと明示されています。このめあてを見るだけで、おおよその授業内容と展開が見えてきそうですよね、これが見通しの持てるめあてになるのだと思います。めあての目的が、子供たちに見通しを持たせることを意識するのであれば、このような具体的なめあてが必要となるのだと思います。